
偽物語【桃太郎～戦闘音は熱いビートのドラミング～】

榊原 元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

偽物語【桃太郎】戦闘音は熱いビートのドラミング】

【Nコード】

N1641P

【作者名】

榊原 元

【あらすじ】

偽物語の第二弾。原作は桃太郎……の、はずだったが、どこで路線を間違えたのか。誹謗中傷が飛び交い、ムチャクチャなキャラクター。物語を現代風に書き換えたのが間違いの始まりだったかも。とりあえず桃・犬・猿・雉で鬼退治。

（前書き）

『目指せ！ お気に入りユーザー！』 『物語の構想を練る練習』を
目指した短編集の第二弾。
面白くても、つまらなくても感想を頂ければ幸いです。

高校生の義務である1日のカリキュラムを全て完了した学生に待っているのは自由な時間。それ即ち、放課後である！
いやっほおおーい！！ 来たぜ、俺の時代が！！

「つつても、やることも無いんだよな。英・数・科学の宿題以外」
放課後の文化部用に宛がわれた小さな部室で、俺こと桃塚太郎ももづか たろうはある意味燃え尽きていた。
あああ、暇だああ〜。

様々な人に一番苦痛なことは？ と、問い掛けると『暇な仕事』
と言うらしい。確かに暇って辛いよな。
気が緩むって言うか、刺激がなくてツマらないって言うか。

「……そんなに宿題があるなら一つでも終わらせたらどうなんだ？」

俺にそう諭すのは同じボランティア部に属する雉子島隼人きじしま はやと。小難しい文学の本が映える好青年だ。

何故、お前さんの名前には捕食者と被捕食者が同居しているんだい？ と聞いて、喧嘩してからの古い友人。

こいつの名前に触れるのは仲間内では勿論タブーに入っている。
昔は名前のことで色々あったそうな。

あえて深くは聞かない。人の心の中には、土足で踏み込んだりイケない場所もあるってことだぜ坊や。

……どんなキャラだよ、俺。

「シुकダイ、ゼツタイ、イヤ」

「麻薬撲滅のポスターみたいに断言しなくても……」

雉子島は読みかけの本に頬を挟み、呆れた顔で俺を見つめる。ふん、そんな顔をして俺の勉強への意欲（マイナス側）は揺るがないぜ。

俺は自分に嘘はつきたくないんだっ！　って言うとなんかいいよな。やる気ないだけなのに。

「タローっ」

ガラガラと扉を開けて俺目掛け突撃する小さな影。回避すれば彼女は壁に突っ込み怪我するのは必然。

だから、重い彼女の愛（物理的な）を俺は全身で受け止める。

「はぶしゃい!？」

「会えなくて、寂しかった」

男泣かせな台詞を言ってくれているが、俺にそんな余裕はない。内臓的なものが、ヤバイ……。

「ひゅー…ひゅー…」

「桃塚、呼吸音が変だが大丈夫か？」

んな訳ねえだろ！　声を荒げようとしたが声が出なかった。これは、あれだな。俺の内臓がビッグバンでホスピタルにゴー、みたいな？

「タロー、だいじょぶ？」

「ひゅー…ひゅー…」

自分のせいで俺が苦しんでいることが分かった彼女——いぬかわ あいか 狗川愛華は泣きそうな顔だ。心なしか、彼女の頭上のアホ毛も垂れ気味。

俺の状態は声は出なくとも腕は動く。親指を立てて、健在をアピールする。

し、紳士たるもの、淑女を流せる訳にはッ……！

「たたっ、大変ヨオオオ——！！」

大地を揺るがすような咆哮ほうごうが俺の鼓膜に届いた。動かないと思われていた俺の体が勝手に回避体勢を取る。

雉子島も愛華も慣れたように扉から距離を取る。

そして、奴は現れた。

——ガッシャアアアアン！！

部室の扉を体当たりで破壊。だが、体当たりした奴は完全無傷。

「大変なのヨオオオ——！！」

現れたのは体長2メートル位の巨漢。その体毛は人類なのかを疑う毛深さ。筋肉なんて、俺と雉子島が力を合わせても太刀打ちできそうにない筋肉の密度。

これは……そう、アフリカ在住で赤道直下の熱帯森林に住まう類人猿のゴリラちゃんだ。

だって、ありえへんもん。コイツ、何回扉を破壊すれば気が済むの？

分かる？ その度に何故か俺が起これんのよ？
マジないわー！

「……で、なんの用だ類人猿」

コイツの名は小猿愛莉。^{コチノめあいじー}性別は、女。制服は特注品。

苗字は小猿なのに、並の男が束になろうとも叶わぬ膂力。名前は正直、申し訳ないのだがナイ。

それと将来の夢はボディビルダー。ダブルバイセップス・フロント（両腕の上腕二頭筋を強調するポーシング）がよく映える、獅子も恐れる16歳。

「あら、マイダーリンじゃないのヨ」

「……これ以上、戯れ言を又かすとアフリカに特急便で送り返すぞ、
テメエ」

イチャイチャしてる場合じゃなかったヨ、と俺の言葉を見捨てる
ゴリラ。

……テメエ、バラされて東京湾のお魚の餌になりてーのか？

「タローは、私のっ」

ぎゅっと俺の腕を抱き締める愛華。うわあ、柔っこいものがある。

「ダーリンを誘惑してんじゃねえぞ、雌ハイエナがあああ！！」

勘違いも甚だしいよ、お前。

お前の相手なら動物園にいるから、そこへ行つてこい。金輪際、俺の視界に入るな。バナナとプロテインでも喰つてろ。

「……で、本題はなんだい、ゴリ子」

「ゴリっ……」

「ほら、時間が無駄だから用件は何だって聞いてんだよ、ゴリ子」

「モオー！　ゴリ子なんて酷いウホオー！」

頬を膨らませ、半眼で雉子島と俺を睨み据えるミノタウロス。その粘っこい視線に俺も雉子島も一步退く。

恐怖か……いや、これは生理的な嫌悪感からだ。単刀直入に言っちゃえば、貞操の危機感。

「霊長類、用件は？」

「何時までダーリンに縋り付いてんだ、盛りがついた雌犬がぁー
ー！！！」

話がまったく進まないこと氣遣った愛華がゴリ子に用件を切り出すと、俺の隣にすることが氣に食わない発情期のゴリ子が愛華に向かって吠えた。

その形相たるや、万の敵軍に果敢にも一騎で立ち向かう歴戦の武人のよう。

その一喝で、窓ガラスにはヒビが。

……ホントに勘違いしていて悪かった。せめて1%は人間だと思っていたのだが、奴は人間の範囲外だったらしい。

モンスターとしての名前は『ミノタウロス』から『ヘカトンケイル』にランクアップだ。おめでとう。

「いいから、さっさと話せ、筋肉」

「又ウウウウー……」

ふしゅー、とゴリ子が業務用扇風機並の息を吐き、最新式掃除機並の吸引力で空気を吸い込むと、やっとこさ冷静な判断力が戻ってきたらしい。

ようこそ、お帰り。人間側へ。

「そうそう、柴刈さん宅のお婆ちゃんが体調不良で倒れたらしいのヨ」

「はあ？ あの元気が取り柄の婆さんがか？」

柴刈さん宅の婆さんはご町内でも有名な年寄りだ。

基本的な移動は徒歩。毎朝のランニングを欠かさず、スーパーで買った米30キロを肩に担いで帰るような元気な人が……体調不良だあ？

「最近、真夜中にバイクの騒音で寝付けなかったのが原因みたいヨ」
「……バイク…騒音…ああ、噂の“鬼ヶ島”^{おにがしま}とか言う暴走族の騒音でつてこと？」

“鬼ヶ島”ねえ。時勢に疎い俺さえも知っている。最近、ちよつと調子に乗っちゃってる感じの不良グループの名前。

構成員は20人前後。夜な夜な違法改造したバイクで道路を走り回る、他人の家の器物を破壊する、などの行動している馬鹿共だ。

「……ふうん。慈善活動と題して、その不良グループを潰そうって魂胆か？」

「フオオオオーーーー！！ 流石はダーリン、以心伝心ヨオオオ！！」

いやいやいやいや、テメエさんの凝り固まった一方的な正義感と偏見、策を弄することなど不可能な筋肉脳から考えれば既に答えは決まったようなものだろ。

日本語より肉体言語を得意とするゴリ子ならではの解決策だ。

(……なあ、どうするよ？)

(どうするって言われても……ゴリ子一匹で、不良グループはリン

ゴミたく潰せるでしょ）

勿論、ゴリ子はリングを握力で破砕することが可能だ。その潜在的な戦闘力は俺達では計り知れない。

（なんで俺達の部活動に不良グループを潰す話を持ち込むんだ、このゴリラ）

（……まどろっこしい言い方だね。俺達、ではなくて俺、でしょ。それに彼女の思考回路は単純だから、持ち込む理由なんて分かり切ってるくせに）

言うな。言わないでくれ。ああ、分かってる。分かってるさ！

俺に話を持ち込む理由なんて一つしか無いってことは！

要はアレだろ！？　ダーリンと一緒に活動したいウホォー、ってことだろ！？

知ってるＹＯー！！

（たまには一緒に行つてあげなよ）

（待て待て！　お前は知らんだろ！　奴に腕を掴まれ、街を歩く時の周囲の視線の生暖かさをツ！

それに俺はツ——）

なんて暴言を。そう言えば、あの情報をまだ雉子島には伝えていなかったか。

雉子島の驚く顔を思い浮かべながら口を開いて言い掛けた時、俺の制服をチョンチョンと引っ張る者が割り込んだ。

「タロー、私も手伝う」

「……はあ！？」

「ホアア！？」

「へえ」

なんと、予想外に積極的な発言をしたのは愛華だった。

普段は人見知りで、何事も消極的な愛華が……桃塚さんはビックリです。

確かに俺も驚いたけども、ゴリ子は驚き過ぎだ。驚愕の声、ってか奇声に近い。

「柴刈の婆ちゃんの仇、絶対に取る」

「いや、婆ちゃん死んでないから。そんな悲壮な眼で決意しなくても」

雉子島の冷静なツツコミが入るが愛華の眼に宿った決意は揺るがない。

「婆ちゃん、私に何時もお菓子をくれたの。私は、絶対に許さない」

「……………」

強い思いを持った愛華に俺達は何も言えなかった。例え「あれ？　ただ餌付けされただけじゃね？」とか思っても、決して口に出せる雰囲気じゃなかった。

「タロー、だめ？」

……ハイハイ、分かりましたよ。　　ったく、我ながら愛華には甘いな。

「分かった。分かったから、捨てられたチワワみたいな目で俺を見ないでくれ」

そんな潤んだ目で、上目遣いとか卑怯だぞ。何もしてないのに良心が痛むぜ。

せめて、親友でも巻き込まなきゃやってらんないね。

「……もち親友も行くよな？ な？」

「いや、僕は――」

「……キージ、だめ？」

雉子島は愛華に見詰められ、言葉を嚥んだ。まあ、お前の心境は痛いほど分かるぞ親友。

内心では拒否の感情と良心がせめぎ合っているに違いない。

「……ハア、選択肢なんて一つしかないじゃないか」

いやあ、雉子島は潔いね。もう少し感情が粘ると思ったが決着は早かったか。

「よし、今夜の１１時に校門前に集合な。雉子島は、その“鬼ヶ島”とやらが集まる場所とか時間とか調べといてくれ」

「了解。今回のボランティア活動は骨が折れるね」

「２人とも、ありがとう」

「……どういたしまして」

一度決めたら即・行動。

雉子島に情報は任せて、俺は得物を取りに自宅に帰るとしよう。
決戦は、今夜だ。

「レレレ？ ワタシが提案したのに雌犬がお願いしたような流れになってるヨ！？ ホワイ！？ あの雌犬メ、いいところ取りたあイイ度胸じゃねえかああ……… って誰もいなあーい！！

ハブ？ まさかのハブ？ 提案者をハブるなんて信じられないヨ
オオオオオオオオオオオオウ！！！」

俺達が解散した後、一匹の獣が部室で不満を叫んだ。らしい。

▼ ▼ ▼

現在の時刻は午後11時。我々、ボランティア部のメンバーは時間外の部活動を、警察や教師の目を逃れつつ開始しようとする……。

「何故、非人類なお前がいる？」

「ダーリンの為なら何処までも」

薄手のＴシャツと黄色のスパッツという青酸カリ並の毒素を排出している出で立ちで奴は現れた。

そう。皆様ご存知ゴリ子である。戦力には申し分ないが、存在に難あり。ご退場願いたい。

「……タロー、似合う？」

それとは真逆にマイナスイオンの物質を放出しているのがボランティア部のアイドル、愛華ちゃんだ。

清楚な白いワンピースに、小さな花の飾りがついた可愛い靴。ファッションを気にしない俺さえもよろめく威力だ。

俺の反応が気になるのか、愛華のアホ毛が妖気アンテナのようにピンと張り詰めている。

かつ、かわええ〜。

「愛華ってさ、ホント可愛いよな」

「……………そう」

たった一言。愛華の反応はそれだけだが、アホ毛は犬の尻尾のよ
うにピコピコと揺れていた。

表面化はしないが喜んでくれている。俺はその姿で満足。
だが、それを黙って見ていられない人間っぽい奴もいる。

「貴様はデート気分か雌犬うううツ!!」

戦争を舐めてるのかア、と咆哮するゴリ子。お前、夜中に煩いわ。
近所迷惑だから檻に帰って寝なさい。てか寝る。

「……ハア、バカなことしないで早く終わらせよう。明日も学校
なんだから」

雉子島は真面目だねえ。俺なんて、明日は体調不良で休む気満々
だったのに。

街の平和の為に貢献するんだし、そのくらいは優待されてもよく
ね？

……まあ、栄えある欠席日数にプラス1が加算されるが……些細
な問題さ。まだまだ進級には問題ナッシング。

日々、どの教科が、どの程度で赤信号かをばかり考えているのだ。
無論、不備はないさ。

………将来、俺に子供がきたら今の俺の姿は絶対に見せらん
ないぜ。

いかに上手にサボタージュするかを常日頃から考えている父親。
うわぁー、情けねー。

「だな、俺も寝たいし。ところで雉子島も得物は持って来たんだろ
？」

「当たり前じゃないか。不良グループとの武力衝突なんだから」

ホントは武力行使は好きじゃないんだけどね、と雉子島。ボヤくなボヤくな、拒否しなかったお前が悪い。

まあ、拒否したらしたで最低だと罵ってやるがな。

「タロー、キージ、早く行こ？」

「了解」

「おう、さっさと決めてやろうぜ」

俺達は踵を返し、不良グループの待つ……………。

「…………場所は？」

「町外れの廃工場」

そう、町外れの廃工場へと向かった。

「テメエが仕切るんじゃないやねえヨ雌犬ううう…………あれ！？ ワタシを待ってはくれないノオオオオ！？」

デジャヴ？ まさか、本日2回目のデジャヴですかネ？」

…………後ろの奴は真夜中だったのに騒がしいね。もう少し周囲に気を配って欲しいもんだ。

▼ ▼ ▼

はい、町外れの廃工場に到着！。その間の出来事と言えばゴリ子が騒いだくらいなので省略しまーす。

で、現在の俺達は廃工場の中を窺っている最中だ。勿論、奇襲で仕留める。

「奴さんの数は？」

「20の……4つてところ」

うへえ、無駄に多い。

「ウホッ、いい男ばかり。勿論、ダーリンが一番ヨ」

「余計な一言は寝言だけにしろ。俺はお前の顔だけで堪忍袋の緒が切れそうだ」

発情期のゴリ子の中には不良共に興奮状態。うざっ、俺に顔を近付けるな！

……お前の鼻息が顔に当たって気持ち悪いんだよ！唇をツ、突き出すなア！！

「アボオウ」

気が付けばゴリ子の顔面に全力の拳を叩き込んでいた。筋骨隆々のゴリ子と言えども顎を狙った一撃にはよろめいた。

ああん、と自慢のハスキーボイスを色っぽく……は、ないが出しながら廃工場の中へと――

「誰だ、テメ……ひい！？」

あんの馬鹿タレ。奇襲の予定が敵に感ずかれやがった。どうせなら、この場で完全に意識を沈めときゃ良かった。

「何だ、このモンスターは！？」

「どこから湧いて来やがった！？」

でも、相手がゴリ子の容姿にビビっているのは嬉しい予想外。初っ端からモンスター扱いされるとは流石だ。

「俺は悪くない。無罪を主張する」

「うん、今のは仕方ないね」

俺達も仕方なしに突撃する。

「何だ何だ！？ 次から次へと！？」

「……いや、待てよ。ほら」

最初は俺達の登場に驚いていた不良共は、徐々に冷静さを取り戻してきた。

そりやそうですよねー。ゴリ子はボディビルダーみたいな体格だけど、雉子島は見た目だけは優男だし、俺は普通の見た目だし、愛華に至っては論外。

舐められて当然だ。

「なあ、そこのお嬢ちゃん。俺達と遊ばない？」

「ギャハハハッ、楽しいぜえ？」

「忘れられない夜にしてやるよぉ？」

下品に笑う不良共。

ええーっと……こんな屑でも動かない肉塊に変えちまったら犯罪なんだっけ？

ホント、このクソ平和な日本はつまらねーなア。人の世に要らねーゴミを処分する善人を裁くたア――

（桃塚、落ち着け）

雉子島に肩を掴まれ、耳打ちされた。深呼吸を一回するとドス黒い感情は尻尾だけ引つ込めた。

だが、顔は出したまま。どうやら全員に病院生活を最低1ヶ月、後は心の傷をプレゼントしなきゃ引つ込みがつかないか。

「……………」

無言で俺の背中に隠れる愛華。その体は、小さく震えていた。

……… かつ、かわええ〜！！ この小動物ごっつかわええ〜…

…ごほん、この屑共め、愛華を怖がらせるとは許せん。

リハビリも含め、2ヶ月以上は入院してもらおうとしよう。

「あらら？ 弱そうな男の後ろに隠れちゃったぞお？」

「ほら、ボクら優しくするからさあ」

いい加減、潰すか。そう思い、獲物の木刀を取り出し――

「なぜ雌犬ばかり構うんだヨ！！ ここにも可愛いレディがいるのにイイー！！」

その叫び声で全員が動きを止めた。

「…………… え？ 何が？」

「可愛い？ どこに？」

「いやあ、ボールどころかワイルドピッチじゃねえか？」

「ない。ないな」

「うん。ないね」

「自意識過剰」

不良共に、仲間内からも結論は有り得ないとの満場一致。

シリアスだった場面を打ち壊して、さらにギャグへと持って行く能力はコメディアンとしては素晴らしい逸材だ。

だが、逆に言えば空気の読めないお馬鹿ちゃん。

この場合は……まあ、後者だろ。」

「ダーリンもオ、何で雌犬ばかりイイイイイ！……！」

妬ましいイイイ、と夜に吠えるフランケン。あ、またモンスターに戻ったぞ？

いや、この際だし流れで言うか？ 雉子島に黙っとくのも何だし、ゴリ子は鬱陶しいし。

「俺と愛華、付き合ってるんだけど？」

「あ、やっぱり？」

「……ホオアー……」

驚愕の表情で茫然自失のゴリ子に対し、雉子島は得心がいった様子だ。

「気付いてたのか？」

「分かり易いからね、2人共」

まったく、気付いてたなら聞いてくれればいいのに。どう言い出そうか悩んでた俺が馬鹿みたいじゃないか。

……はあ、なんか疲れたな。気疲れだろうけどさ。

「——ホオアタアアアア——！！！」

突然の奇声。そして聞き覚えのありすぎる声色。本日何回目の奇声だよ、このゴリラ。と、何気なしに視線を向けて——俺は……い

や、この場にいる全男性が後悔しただろう。

このゴリラ、盛り上がった筋肉で薄手のＴシャツが破り捨てられていた。

色っぽく言えば“女の子のポロリ”である。が、盛り上がった筋肉に、女性らしさは皆無。

全員が見つめるのは鎧の如き大胸筋と腹斜筋、その巨体を支える丸太の如き大腿四頭筋だ。うわぁ、プロテインが主食？

「ツキアウ、ホントカ？」

「あ、ああ、ほぼ本当だぞ？」

殺気立ってやがる。これは、ヤバい。人間としての本能が奴から逃げると叫ぶ。

お前じゃ勝てない、殺られる前に逃げろ。と。

だが、俺の後ろで怯えきっている愛華を連れて逃げるのは至難の業。俺の命を賭して愛華だけは守るッ！

そう覚悟を決めて奴を見据える。が、奴は俺から視線を外し、不良共を見た。

不良共の顔にはありありと恐怖心が張り付いていて、中には腰を抜かす奴まで現れた。屑共だが、同じ男として同情を禁じ得ない。

「ワタシ、シツレン。カナシイ……」

「だっ、だから……？」

声が震えて発音できていない。彼らには見えているのだろう。死兆星が。

（桃塚ッ！！）

（言われんでもッ！！）

（ガクガクブルブル）

奴の眼には不良共しか映っていないだろう。その内に、俺達は戦線を離脱する。

お仕置きは……ゴリ子が前線に投下された時点で決まっていた運命だろう。うん、俺達は何にも悪くない。

「ワタシヲ、ナグサメヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオツ!!!」

「ヒイイッ!? 誰かア、助けっぎゃあああ——!!」

「助けてえお母ちゃーん！！」

後ろの悲痛な声は聞こえない。慰めるの意味なんて俺は知らない。年甲斐もなくお母さんと呼ぶ彼らの、心に負うであろう傷なんて知らないんだ。

「……桃塚、後で彼らのケア——」

「皆まで言うな」

俺達は今日の出来事を忘れるべく、帰宅の路を急いだ。

▼

▼

▼

と言う訳で後日談。

その後の俺達と言うと――

「なんで人のダーリンに手作り弁当なんて振る舞ってやがるんだ雌犬うううー！！！」

「んぐんぐ……彼女としての義務」

「ちょっと、昼食の時くらい静かにしてくれないかな？」
「まったくだ」

この4人の関係はまったく変わっていなかった。いや、少しだけ変化はあった。

ゴリ子は「ゴリラって一夫多妻なのヨ」と爆弾投下、それから愛華は積極的に俺の彼女だとアピールし始めたのだ。

後の『第一次狗猿戦争』と呼ばれる女同士のドロドロの抗争である。

そして、俺達は部活動の内容に、心に傷を負った人々を社会復帰させる為のセラピーを組み込んだ。

何故？ 誰の為に？ 俺達がセラピーを行うのかは……まあ、言わずもがな。そう、俺達は前を見て進めないのだ。過去ばかり見ていては駄目なのデス！

……なんか、格好いいこと言えば誤魔化せるかな、なんて甘い考えでした。はい、スイマセン。

「ゴリ子こそ、タローを諦めて、上野動物園で相手を探すとイイ」
「チェメエ……今日こそワタシの奥義で沈めてやるヨー！」

はあ、少しは巻き添えを食う俺のことも考えてくれないかね？

お陰様で体重は4kg減だよ。

「あ、そうそう。柴刈のお婆さんが元気になったって話は聞いた？」
「ああ、愛華から聞いた」

ぐっすりと熟睡できるようになった柴刈さん宅の婆さんは元気になったそうだ。リハビリとして、毎朝5kmのランニングをしているとか。

婆さんも元気になり、俺達の関係も一段落……とはいかないが、これもまた新しい日常なのだろう。

「タロー、ゴリ子がウルサイ」

「逃げるんじゃないよ雌犬ウー！」

「埃が立つから静かにして」

「……ったく、煩い奴らだ」

ならば俺はこの青春を十分に謳歌させてもらおうとしよう。ゴリ子と雉子島と、愛華と俺のダラダラとした下らない青春を。

昔話風に言っならば、めでたしめでたしって言えるかもな。

（後書き）

はつきり言います。作者的には駄作です。本当ならば、もう少し上手く出来るハズでした。

しかし、こう言う作品も出してみるべきかと考え、投稿と致します。

テンポの良いギャグは好きですが、作者としては誹謗中傷があり過ぎ。イメージは“餅搗き”のようなテンポを書きたかったのですが……“搗き”が多すぎたかなあ、と言う気がします。

これに関しては、作者も思う所が多々ありますので、読者の方の様々な感想を頂ければ短所を直して望みたいなと思う所存です。

最後まで読んで下さった読者の皆様、ここまでお付き合い頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1641p/>

偽物語【桃太郎～戦闘音は熱いビートのドラミング～】

2010年11月27日12時24分発行